

子どもの「よいところを伸ばす」関わり方をうながす教育実践研究

—WISC—IVを用いたアセスメント方法—

田中 花子

Hanako TANAKA

Approaches to Encourage Parents in Developing their Children's Abilities

—Based on WISC-IV Assessment Method—

【 要 旨 】

筆者は、子どもの「よいところを伸ばす」関わり方とはどのようなものか、また、その関わり方をどのように保護者に助言し、うながすべきかを研究した。

初めに、子どもに知能検査（WISC—IV）を実施した。その後、保護者一人ひとりに検査から得られた子どもの認知の特性を伝え、保護者の頑張りを認める声かけを行った。続いて、子ども自身の頑張りが抱える問題、困り感について具体的な生活や学習場面を例に挙げながら話した。最後に、子どもへの関わり方のポイントを提案した。具体的には、その日から実践可能な方法を伝えることで、保護者の不安感を軽くし、実践意欲をうながした。1—2か月後、保護者と教員を対象に、子どもに対して有効だと思われた関わり方を質問し比較検討した。結果、筆者と保護者と教員のいずれの立場からも有効だと思われる関わり方は「ほめる」「励ます」ことであった。

【キーワード：WISC-IV 小学生 保護者 アセスメント よいところ】

I はじめに

これまで、知能検査の結果を見るととく「弱点」や「苦手」ばかり目につき、弱点や苦手の克服指導や支援に重点をおきがちであった。しかしこれでは子どものモチベーションや自己肯定感、自尊感情は低下する一方である。本研究では、保護者に日常の子育ての中で、子どもの「強み」や「得意」をみつけほめることを実践してもらい、その結果や効果を追跡調査していく。

本研究では、WISC—IV（WISC—IIIの改訂版）という知能検査を中心に、検査結果から読み取れる子どもの「強み」や「得意」等の「よいところ」を中心に指導や支援をしていこうというものである。これにより、子どものモチベーションや自己肯定感、自尊感情が高まり、これまで苦手だったことにも進んで取り組んだり、何事にも前向きな

考え方をするように変わったり、自分自身への評価観が変わる等の結果が期待される。また、同時に人間関係の改善も予想される。

そこで、子どもが最も安心できる家庭、特に母親からの愛情や期待で、子どもの「よいところを伸ばす」ことはできないかと考えた。本研究では「教員期待効果」を保護者の立場に置き換えて、保護者の養育態度の変化をうながすことが子どもにどのような影響を及ぼすかについて研究を行う。

更に、子どもの「よいところ」をどのように見つけ、保護者にどのように伝えと保護者の関わり方の変化をうながすのに効果的なのかを考える。本研究では、保護者が納得できるような子どもの「よいところ」の客観的データを示す。客観的に見て、その子の「よいところ」だと言えるものを保護者に示すことで、その子独自の個に応じた保

護者の関わり方の変化をうながせると考えた。

以上のことから、本研究では、子どもの「よいところ」を知能検査という客観的データから見つけ、検査結果を保護者に説明し、子どもの認知の特性を踏まえた個に応じた関わり方を工夫し家庭で実践してもらおう。さらに、時間をおいて保護者の関わり方の変化により、子どもにどのような変化があるのかを調べていくこととする。

II 研究目的・研究仮説

1 研究目的

子どもの「よいところ」を伸ばすための保護者の関わり方とはどのようなものか、また、その関わり方をうながすためにはどのような伝え方が有効なのかを調べるために以下の研究を行った。

(1) 保護者対象（研究1－研究3）：

知能検査 WISC-IVを中心に、検査結果から読み取れる子どもの「強み」や「得意」等の「よいところ」を中心に保護者に知らせる。このことが、保護者の関わり方にどのように影響をするのかを研究する。検査に対する抵抗感を和らげる保護者支援（検査依頼）の方法を考え、検査結果の伝え方（アセスメント）の工夫や結果の生かし方を具体的に保護者に還元する方法を考える。さらに、保護者の関わり方の変化により、子どもたちにどんな影響や変化が表れるのかを調べる。子どもの「よいところを伸ばす」保護者の関わり方が子どものどのような力を伸ばすのかを考える。

ここでいう「アセスメント」とは、知能検査の結果からわかる子どもの認知の特性やその特性に応じた子育てのアドバイスである。

(2) 教員対象（研究4・研究5）：

知能検査（教育現場でよく用いられる WISC-III）の検査結果のプロフィール表を、どのくらい信頼し、活用しているのかを調べる。また、検査の認知度や結果がどのくらい指導や支援にいかされているのか、今後の活用意欲等を調べる。更に、保護者の関わり方の変化により子どもの変化がうながされるとすれば、どのような関わり方が有効なのか、教員の視点から有効な関わり方を考える。

2 研究仮説

(1) 知能検査（WISC-IV）の結果からわかることを基に、保護者に子どもの「よいところ」

「頑張っているところ」を中心にアセスメントすることで、子どもに対してほめたり、認めたりする機会が増え、子どものことを肯定的にとらえた子育てや関わり方ができる。

(2) 知能検査（WISC-III）の結果からわかることを基に、教員が教育の現場で結果を有効に活用する（結果から有効な方略を考える）ことで、子どもたちの関わり方を変えたり、工夫したりできるようになる。

以上の2つの仮説を基に研究を進めていく。

III 研究報告

1 研究1

(1) 目的：知能検査という客観的な検査をして数値化された子どもの知能を知ることにより、保護者の子育てに対する意識や子どもへの接し方に変化があるかどうかを調べる。

(2) 対象・日時・場所

①検査対象：小学校1校、36世帯、児童数47人、男子29人、女子18人を対象。

②検査日時

ア、知能検査：一人70分－150分程度。

6月25日－8月24日のうち29日間実施。

イ、検査結果のアセスメント：一人当たり30分－60分程度。6月28日－8月26日のうち24日間実施。

ウ、検査結果のアセスメント後の変化Ⅰ：

イ、その後、約1－2ヶ月後に質問紙を用いて実施。回収期間は約2週間を設けた。

エ、検査結果のアセスメント後の変化Ⅱ：

ウ、その後、約1ヶ月半後に質問紙を用いて実施。回収期間は約2週間を設けた。

③検査場所：知能検査と結果のアセスメントは、対象者が通う小学校のPC（パソコン）ルームで実施。

(3) 方法

①知能検査

ア、知能検査の事前調査：対象者47人の保護者に、事前調査表を配布、記入、回収。

イ、知能検査の実施：株式会社日本文化科学社の「日本版 WISC-IV知能検査」を実施。

②検査結果のアセスメント：児童一人ひとりにアセスメント表を作成し、検査結果を保護者に面談後、返却。結果を伝えた直後、保護者の子どもの見方や結果の印象を3択で調査。

③検査結果のアセスメント後の変化Ⅰ：質問紙

法により調査。「保護者アンケート①」を配布し、その後の様子を自由記述で回答を得た。回収率は47人中45人回収で95.7%。

④検査結果のアセスメント後の変化Ⅱ：対象者は、「③検査結果のアセスメント後の変化Ⅰ」の結果、研究に継続して「是非協力したい」と答えた22世帯、児童数30人。回収率は30人中22人回収で73.3%。

ア、保護者アンケート②：質問紙法により調査。「保護者アンケート②」を配布し、その後の様子を4件法で調査。

イ、子どもアンケート：質問紙法により、参加児童に「子どもアンケート」を配布し、4件法で調査。

(4) 内容

①知能検査

ア、知能検査の事前調査：i 家族構成，ii 連絡先，iii 子どものよいところや得意なこと（10個程度），iv 最近子どもをほめたことの具体的エピソード，v 子どもの気になるところや苦手なこと（10個程度），vi 今回の研究への参加理由，vii 知能検査に対するイメージ。

イ、知能検査の実施：「WISC-Ⅳ知能検査」を実施。子どもの知的発達の様子を多面的に把握し、アセスメント表を作成。

②検査結果のアセスメント：検査結果から分かる「よいところ・強み」と「苦手なところ・弱いところ」，児童の認知特性からの「子育てアドバイス」を記入。このアセスメント表と個人の検査結果を表すプロフィール表，今日すること表の3点を保護者に提示し，面談。検査結果を伝えた直後，保護者の子どもの見方や結果の印象を調査。

③検査結果のアセスメント後の変化Ⅰ：a 「検査結果を知って以降の自分自身の変化や結果を聞いた感想」，b 「結果を聞いて以降，子どもへの関わり方で心がけたこと」，c 「心がけて接することによる子どもの変化」，d 「子どもの変化を見たり，変化に気づいた時にどう思ったのか」，e 「研究に参加しての感想」。

④検査結果のアセスメント後の変化Ⅱ

対象は、「③検査結果のアセスメント後の変化Ⅰ」後，研究に継続して「是非協力したい」と答えた22世帯児童数30人。

ア、子どもアンケート：i 「最近のおうちの人の変化」，ii 「最近の自分の変化」，iii 「検査結果をおうちの人から聞いたかどうか」について，4件法で調査。

イ、保護者アンケート②：i 「最近の自分自身の変化」，ii 「最近の子どもの変化」，iii 「最近のパートナーの変化」について，4件法であてはまる程度を調査。

ア、イ共に「よくあてはまる」を「4」，「全然あてはまらない」を「1」として回答を得た。

(5) 結果

①知能検査について

参加した児童の人数は，世帯数は36世帯，男子が29人，女子が18人の合計47人。

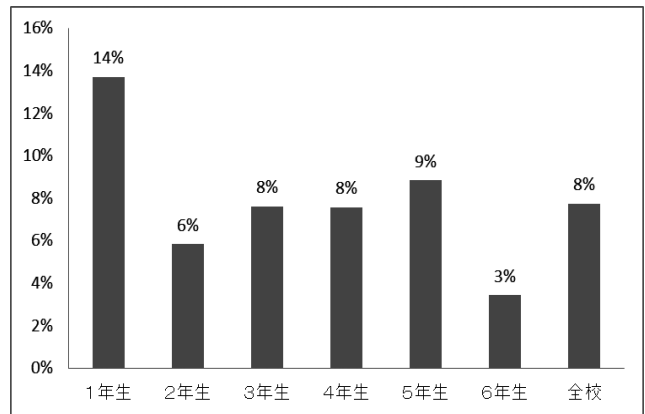


図1 研究参加人数割合 (%)

ア、事前調査について

「子どものよいところや得意なこと」として保護者が多くあげたことは「友だちとの関係づくり」23人であった。次いで「やさしい，思いやりがある」で22人であった。「運動ができる」も多く15人であった。「明るい，笑顔，元気がいい」や「自分のことが自分でできる」もそれぞれ14人，13人と多かった。

「最近子どもをほめたことの具体的エピソード」では，「学習に関すること」が20人で最も多く，具体的な内容は「宿題」に関することが多く9人。次に「字を丁寧に書いた」ことをほめた人が4人であった。それ以外では「お手伝い」をほめた人が14人で多かった。

「子どもの気になるところや苦手なこと」は，「集中力がなく，落ち着きがない」が最も多く16人であった。次いで「言われたことができない。忘れてしまう。」「片付

げができない。物がなくなる。」が 11 人と多かった。

「保護者の研究への参加理由」は、「子どものことが知りたい」、「具体的な行動面での心配」がいずれも 16 人と一番多かった。

「知能検査に対するイメージ」は「子どもの本来の力や普段は見えない底力が分かるもの」と考える人が 21 人と最も多かった。イ、知能検査の実施について（表 1）

知能検査の結果、個人の力の中で「VCI」が最も強い子どもが 22 人（46.8%）と最も多かった。反対に最も弱い力は「WMI」で 21 人（42.8%）であった。

表 1 知能検査結果の個人内最大指標と最小指標の人数(人)(内は%)

	VCI	PRI	WMI	PSI
最大指標 max	22(46.8)	12(25.5)	4(8.5)	9(19.1)
最小指標 min	7(14.2)	8(16.3)	21(42.8)*	13(26.5)*

*は個人内で同値であったため両方にカウント

②知能検査の結果を伝えてからの変化Ⅰ:検査結果を伝えてから約 1 ヶ月－2 ヶ月後アンケートに対して、「子どもに何らかの変化があった」と答えた保護者は 33 人。これに対し、「子どもの変化はなかった」は 12 人であった。知能検査結果から、子どもの特性や関わり方のアドバイスを聞いて、家庭で実践した感想は、回収できた 45 人すべてが「とても参考になった」「まあ参考になった」と答えた。

③知能検査の結果を伝えてからの変化Ⅱ（30 人中 22 人回収）の平均を調査（最高 4，最低 1）

ア、子どもアンケートの結果：「最近のおうちの人の変化」は、「おうちの人と一緒に食事をする時間が増えた 3.45」が最も多く、次に「勉強する時に、おうちの人が教えてくれるようになった 3.27」が多かった。一方少なかったのは、「宿題や持ち物を見てくれるようになった 2.32」「おうちの人の怒り方が変わった 2.36」であった（全体の平均は 2.81）。「最近の自分の変化」は、「学校が楽しくなった 3.43」「勉強を以前より頑張らなくなった 3.43」が最も多く、次に「おうちの人といっしょにいるのが楽しい 3.38」「友だちとなかよくなった 3.33」

が多かった。一方「いやなことも自分からやってみようと思うようになった 2.45」

「自分に自信がついた 2.77」「きょうだいなかよくなった 2.78」は少なかった（全体の平均は 3.05）。

イ、保護者アンケート②の結果：「最近の自分自身の変化」は、「子どもと話をするようになった 3.31」「子どもを励ますようになった 3.31」が最も多く、次いで「子どもと一緒に食事をする時間を増やした 3.19」が多かった。これに対して少なかったのは、「子どもに読み聞かせをするようになった 1.94」「子どもの学習環境を整えた 2.44」であった（全体の平均は 2.88）。

「子ども変化」は、「子どもが『見て！』『ねえ！』等と言うようになった 3.19」「子どもが自分からやろうとするようになった 3.19」が最も多く、次いで「子どもが課外活動を以前より頑張るようになった 3.13」が多かった。一方で、「子どもが自分からやろうとするようになった 2.38」

「子どもときょうだいとの関係がよくなった 2.46%」「子どもの反発が減った 2.50」は少なかった（全体の平均は 2.83）。

「パートナーの変化」は、「子どもについて夫婦で話すことが多くなった 3.27」というのが最も多く、次いで「子どもと話をするようになった 3.20」「子育てに対して協力してくれるようになった 3.20」「子どもの話を聞くようになった 3.13」の順で多かった。これに対して「子どもに読み聞かせをするようになった 1.53」が最も少なく、「子どもの学習環境を整えた 2.13」「子どもからのサインを見逃さなくなった 2.33」の順で少なかった（全体の平均は 2.80）。

(6) 考察

本研究の参加児童の状況は、圧倒的に男子が多かった。保護者の子育ての悩みや関わりにくさは男子の方が多いと考えられる。

学年別の参加児童の状況を見ると、奇数学年と 4 年生の割合が多い。奇数学年と 4 年生は 4 月にクラス替えをしていることが共通点として挙げられる。参加理由の背景には、クラス替えによる子どもの適応の状況が知りたいという保護者の願いが感じ取れる。特に一番多かった 1

年生は、入学して以降の子どもの発達や適応の様子、知能の状況を知りたいという保護者の願いが強いと考えられる。

最近子どもをほめたことの具体的エピソードは「学習」に関する事、特に宿題に関する事が多かった。宿題は基本的に毎日するものであるため、ほめる機会が多いと考えられる。また、学習が「子どもに価値があり、大切なことである」と考える保護者が多いと予想されるので、ほめられる可能性も高くなると考えられる。

また、「お手伝い」もほめられる可能性が高く、実際の結果とも合致している。保護者は、子どもがお手伝いをしてくれた場合「ありがとう」ということが多く、「ほめる」になるのかどうか分からないとの自由記述もあった。

子どもにとっては「頑張っているね」「ありがとう」「助かった」等は、どれも「自分の頑張りが認められた」ということになり、自己効力感や自己有用感が高められる声かけだと考えられる。「ほめる」効果を保護者が高く評価し、意味を持たせることができれば、自ずと「ほめる」機会が増えると期待することができる。

保護者が考える「子どもの気になることや苦手なこと」の上位はワーキングメモリ(WM)に関する部分が多かった。これについては、47名の知能検査の結果とも合致する。「ワーキングメモリ(WMI)」が個人の4つの知能の指標のうち最も低い人の割合は42.8%であった(表1)。保護者の訴えの中では「子どもの集中力がなく、落ちつきがない」「言われたことができない」「人の話を聞かない」等はWMエラーの特徴である。「集中力や注意の力」の問題というよりは、「記憶力」の問題ととらえる方が、解決方法や指導支援が見出しやすいと筆者は考えた。子どもに「やる気がなく」「さぼっている」のではなく、「覚えることができない」のだということ、まず保護者に知ってもらう必要がある。

本研究への参加理由として最も多かったものは、「子どものことが知りたい」と「具体的な行動面での心配」であった。子どもの力を信じもっと新しいことを知って、応援してやりたいという保護者の一生懸命さがよく伝わってきた。

知能検査という客観的な検査を実施して、数値化された子どもの知能を知ることにより、保護者の子育てに対する意識や子どもへの接し方

に変化があるということがわかった。

2 研究2

(1) 目的：子どもの「よいところを伸ばす」保護者の関わり方の変化をうながすために、どのように知能検査の結果を伝えていけばよいのかを考える。

(2) 対象・日時・場所

①検査対象：研究1の対象と同じ。

②日時：一人当たり30分～60分程度。

6月28日～8月26日のうち24日間で実施。

③場所：研究1と同じ。

(3) 方法と内容

①研究参加者の募り方の配慮：最初の案内状に「お子様の『よいところ』や『得意』なことを知って今よりもっと伸ばしてあげたい、がんばっている我が子にどんな言葉をかけてあげればいいのかわからなくて困ることがある等と感じられる保護者の方には是非ご協力いただきたいと思います。」という一文を入れ、知能検査に対する抵抗感を和らげた。

②研究を進める際の配慮：検査の内容の詳細を知らせ、その上での参加協力の意思を再確認する注意書きを添付した。

③知能検査をする際の配慮

ア、検査場所：子どもの精神的な安心感と安全面等を考慮して、子どもたちの通っている小学校のPCルームで行った。

イ、検査時間：年齢の小さい低学年を優先的に午前中に行った。高学年は午後からが多かったが、夏休み中で暑いことも予想されたので、エアコンをつけ、室内を快適な状態にして午後でも集中できるように配慮。

ウ、検査開始時の出迎え：子どもと筆者も初対面の人が多かったため、常に玄関で子どもを出迎え、送迎の保護者とも顔を合わす機会を作り、保護者も子どもも安心して検査に向かうことができるように配慮した。

エ、検査終了後の連絡：検査終了後、すべての子どもの保護者に連絡を取り、検査が終了したことと帰宅の方法を確認した。これにより、保護者に「お子さんが検査を頑張られた」ことを伝え、ほめる機会を与え、帰宅までの安全面での配慮とした。

④検査結果の伝え方の配慮：検査結果は同じでも、伝え方で保護者の受け止め方は大きく変

わると予想されるので、細心の注意と配慮を行った。まず、約束の時間より5分前に玄関に出て待ち、子どもと保護者を出迎えた。初対面の保護者がほとんどなので、保護者の方に「待っていました」という気持ちを伝え、保護者に参加協力したことを「よかった」と思ってもらえるようにした。

ア、保護者の頑張りを認める

「今回の研究に参加したこと自体で、保護者の方の子どもに対する意識の高さを感じることができる」ことを伝え、保護者の今後の関わりの変化の第一歩が既に踏み出されていることを実感してもらおう。

イ、知能検査と学業成績の違い

知能検査の結果と学業成績は違うものであり、知能検査の結果が国語や算数の成績と同じにはならないことを伝えた。

ウ、検査の結果について

検査結果のプロフィール表を提示し、そこに書かれていることがどのようなことか、また、どのように結果を出したのかを説明した。VCI, PRI, WMI, PSI 等聞きなれない言葉もあるので、一つ一つ具体的にどのような能力を示しているのかを説明した。グラフの見方や能力等の質問も受けた。

エ、知能検査結果からわかる子どもの「よいところ」「苦手なところ」を伝える

オ、苦手なことが具体的に生活や学習の中でどのような困り感となっているか伝える

保護者が記入した事前調査表の子どもの「困っている、気になること」が検査結果にどのように表れているか話した。

カ、得意なことを生かしながら、苦手なことへの抵抗を減らす具体的な方法の提示

キ、子どもの頑張りを見つけ、認め、褒めるプロセスの重要性と斡旋

ク、その他

家庭での困り感や悩み、関わり方の難しさ等の質問に分かる範囲で答えた。

(4) 結果

①研究参加協力者の募集

予想を大幅に超える参加協力者が集まった。参加協力者の参加理由も「自分の子どものことが知りたい」が最も多かった(研究1を参照)。

②事前調査

保護者の子どもへの見方や日常生活の中での困り感を、具体的に知ることができた。初対面の子が多かったので、これを基に担任に普段の様子を聞いたり、授業観察を行うことができた。

③知能検査の実施

事前調査の結果が、検査を行う際のよき視点の一つとなり「見通しを持たせる」「問題を可能な限り繰り返す」「注意を引きながら、検査を進める」等の配慮の工夫ができた。

④検査結果のアセスメント

初対面の保護者が多かったが、検査の際の送迎時に顔を合わせている安心感から、お互いにスムーズに話すことができた。一人当たり30-60分のアセスメント中の筆者の観察から、変化のあった保護者は36人中32人であった。

保護者がどのようなことに気をつけて子どもと接したのかということについては、「ほめる、励ます」が15人と最も多く、次いで「話し方、伝え方の工夫」が10人と多かった。

検査結果を伝えてから約1-2ヶ月後アンケートに対して、「子どもに何らかの変化があった」と答えた保護者は32人。反対に、「子どもの変化はなかった」は12人であった。

具体的な子どもの変化の様子は、大きく分けて「情緒面」「意欲面」「行動面」で変化が見られた。具体的な子どもの変化を見たときの保護者の気持ちは、「親の関わり方や変化が大切であると気づいた」「子どもが変わったことが嬉しく、楽しかった」「これからも関わり方の変化を続けていきたい」というものが多かった。

(5) 考察

知能検査を実施したにもかかわらず、保護者は「学習面」よりも「情緒面」「意欲面」での関わり方の変化を実施した人が圧倒的に多かった。しかし、最終の子どもアンケートでは、「学校が楽しくなった」「勉強をもっと頑張ろうと思った」という子どもが多かった。家庭での心の安定の結果が学習意欲や学校生活への活力につながるということがここでは言えるのではないだろうか。

保護者の関わり方の変化を、検査結果を伝えてから約1-2ヶ月後に調査した。保護者が自分のこれまでの関わり方を見つめ直し、わずかでも自分を変えようと気をつけたかどうかで、結果が変わった。事実、「子どもに変化はなかつ

た」と答えた方の中には、「わずか一ヶ月では何も変わらない」と思いこんでおられた方もあった。これは、保護者の方に自分を変えようという気持ちがないために、子どもの変化を見逃しているのではなかろうか。学童期の子どもが一ヶ月で「何も変化がないとは考えにくい。「子どもを変えたいのならば、まず、保護者が変わらなければならない」ということがここでは言えるのではないだろうか。

子どもの「よいところを伸ばす」保護者の関わり方の変化をうながすために、知能検査の結果を(3)の方法と内容で示したような伝え方をすることは有効であったと言える。

子どもの変化をうながす保護者の関わり方をモデル化した(図2)。これは、知能検査の結果を用いて個に応じたアセスメントを行うことで、保護者の関わり方の変化をうながすことができることを示した。保護者が関わり方を実際に変えることにより、子どもの小さな変化にも保護者は無意識に、敏感になったということである。この子どもの変化に気づいたことにより、保護者の中で関わり方の変化の効果を実感することができる。更に保護者の関わり方の変化を強化、活性化させることができるようになる。保護者の変化と子どもの変化が繰り返すことで、プラスの循環サイクルが生じ、その結果子どもの「よいところが伸びる」のである。

一方で、保護者の関わり方の変化が起こらなかった場合、残念ながら子どもの成長の変化に気づかず、子どもをほめる機会を無意識に見逃してしまう。結果、保護者の関わり方の変化が子どもの変化を通して実感できず、保護者に関わり方の変化の有効性が伝わらない。

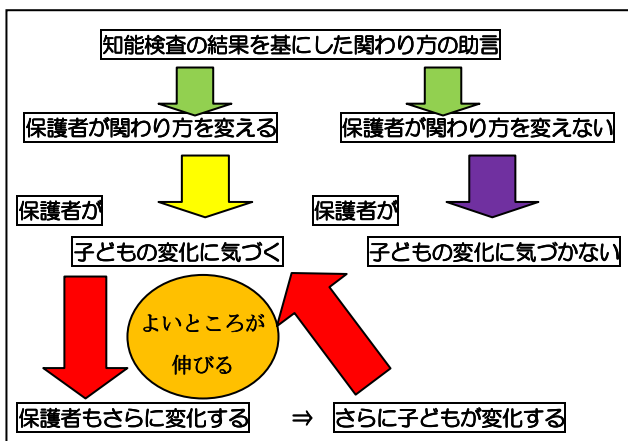


図2 子どもの変化をうながす保護者の関わり方モデル

近藤(1983)は「親のあり方もまた、ひとつの環境である」と指摘している¹⁾。「環境改善」の中には保護者の関わり方の変化も含むということである。まずは、保護者に「自分が関わり方を変えたら、子どもが変わった気がする」という実感を持ってもらう必要がある。保護者に自身の関わり方も子どもの環境の一部であるという見方をしてもらいたい。保護者の関わり方の変化への抵抗をなくすアドバイスが必要である。

3 研究3

(1) 目的：保護者が、普段子どもに対してとっている態度を調べる。

(2) 対象・日時

対象は研究1と同じ。児童の保護者(父・母)に親子関係検査を2回実施。1回目の「親子関係検査I」は7月に配布し、約1週間後に回収。2回目の「親子関係検査II」は研究1の「検査結果のアセスメント後の変化II」と同時に11月に配布し、約2週間後に回収。

(3) 方法

①親子関係検査I：対象保護者に田研出版株式会社の「TK式診断的新親子関係検査」を実施。世帯回収率は34世帯中34世帯で100%。回収率は父親32人中27人で86.5%、母親34人中34人で100%。

②親子関係調査II：「ア、知能検査」で実施した親子関係検査を再実施。回収率は30人中22人回収で73.3%。親自身の自己診断と併せて、4年生以上の児童には子どもから見た親風の診断も調査。世帯回収率は、22世帯中17世帯回収で77.3%、回収率は父親22人中19人で86.4%、母親22人中21人で95.5%、子ども13人中8人回収で61.5%。

(4) 結果(図3)

親視点の自己評価の結果、アセスメント前の結果の平均よりも3-4ヶ月後の平均値の方が低くなったものは、「非難5.2%」「厳格3.4%」であった。これは、親の自己評価の中で「非難」や「厳格さ」が減っていることを意味する。反対に「心配3.6%」「溺愛0.8%」「干渉0.5%」は高くなった。これは、親の自己評価の中で「心配」「溺愛」「干渉」が増えているということである。子ども視点の評価結果は、親が自己評価したものより、いずれも低くなった。

(5) 考察

保護者の関わり方の中で「非難」や「厳格さ」が減り、「心配」「溺愛」「干渉」が増えている。これは、知能検査の結果をアセスメントしたことにより子どもに対する見方が変化し、保護者の関わり方の変化がうながされたことを意味している。特に「非難」のように子どものやる気をそいでしまうような関わり方が減っていることは、望ましい。また、「心配」「溺愛」「干渉」が増えていることから、子どもへの意識が高まり、子どものわずかな変化も見逃さない保護者が増えていると考えることができる。

他にも、両親間の「不一致」が減り、夫婦間で子どものことについて話し合ったり、同じような考えを持って子育てが進んでいる様子がかえらる。本研究が各家庭において、子どもについて保護者間で話し合うよい契機になった。

また、子どもから見た親の態度が、親の自己評価よりいずれも高いことから、子どもがいかに保護者に対して信頼を置いているかが分かる。

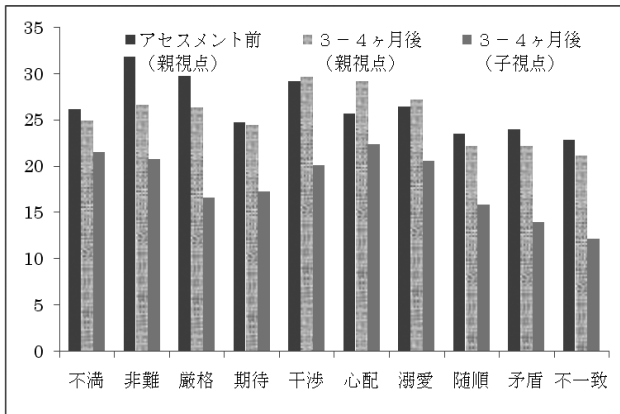


図3 親子関係検査結果の平均 (%)

4 研究4

(1) 目的：教員の視点から見た、子どもの変化をうながす保護者の関わり方として有効だと考えられるものと、教員の期待する子どもの変化を調べる。更に、今後の知能検査の信頼性や活用意欲の変化を調べる。

(2) 対象・日時・場所：研究1で協力してもらった小学校の教員(32人)を対象。11月21日(月)16時40分-55分に実施。同校視聴覚室。

(3) 方法：質問紙法により4件法で実施。

(4) 内容

ア「子どもの変化をうながす保護者の関わり方として有効と考えられるもの」、イ「教員の期待する子どもの変化」、ウ「知能検査や保護者、児童との関わり方の意識調査」の程度を4件法

(とても有効4, 有効ではない1)で調査。

(5) 結果(平均値の最高4, 最低1)

保護者の関わり方の変化で子どもの変化をうながすと考えられるものの中で、教員が有効であると考えられるものは、「子どもの話を聞く3.94」で最も高く、次いで「子どもをほめたり、励ます3.88」「子どもと話をする3.84」「子どもからのサインを見逃さない3.81」と続いた。一方、保護者の関わり方の変化で子どもの変化をうながすと考えられるものの中で、教員があまり有効ではないと考えるものは、「子どもの宿題等を見てあげる3.19」が最も低かった(全体の平均は3.64)。

教員の期待する子どもの変化は、「子どもと保護者との関係がよくなる3.75」が最も高く、次いで「子どもが落ち着いて素直になる3.63」「子どもが以前よりも笑顔が増え、明るくなる3.63」と続いた。一方で、教員があまり期待していない子どもの変化は、「子どもの苦手なものが減る2.91」で、最も低かった(全体の平均は3.37)。「特別支援教育がこれから大切になると思った」の平均は3.78であった(全体の平均は3.63)。

(6) 考察

子どもの変化をうながす保護者の関わり方として有効なものは「子どもの話を聞く」「子どもを励ます」「子どもをほめる」「子どもと話す」といった「言葉」を介した関わり方であることが分かった。子どもが幼いうちは、スキンシップのような関わり方が有効であると考えられるが、子どもの年齢が上がってくると、関わり方も変化させる必要がある。特に高学年になり思春期になれば、子どもの求める「言葉」による関わりや評価を大切にする必要がある。

学校は勉強をするところというイメージが強いが、子どもが学習に向かうための土台として、教員は「家庭での情緒面での安定」を期待している。学校で子どもが学習を頑張るためには、家庭が子どもにとって「居心地がよく、安心して過ごせる場所」「疲れたり、困ったときにしっかり休め、また頑張ろうと意欲が湧いてくる場所」であることが前提となる。「心の安定」を家庭には担ってもらいたいと思う。

5 研究5

(1) 目的：現在、教育現場で働いている教員の

知能検査に対するイメージや認知度等を知る。

(2) 対象・日時：5校の小学校に勤務する 20—50 歳代の教員 107 人で男性 43 人、女性 64 人。1校の特別支援学校に勤務する 20—50 歳代の教員 24 人で男性 10 人、女性 14 人。2011 年 7 月—8 月に実施。回収時間は 3 週間程度であった。回収率は 100%。

(3) 方法 質問紙法で実施。

(4) 内容

①知能検査の認知度・熟知度、知能検査の結果に対する②信頼度、③利用度、知能検査に対する④イメージ（自由記述）を調査した。併せて、現在小学校の現場で広く使われていると考えられる WISC—Ⅲについての⑤知名度、⑥個人プロフィール表の既知度、⑦解釈の方法や、⑧その後の指導支援への活用頻度や、⑨生かし方（自由記述）、⑩プロフィール表の解釈に対する意欲、⑪斡旋状況についても調査した。更に、今年の初めに発売になった WISC—Ⅲの改訂版にあたる、⑫WISC—Ⅳについての認知度も調査した。

(5) 結果

知能検査自体は広く認知され、利用している人が約 8 割であった。中でも WISC の認知度は 100%であった。しかし、知能検査の斡旋経験の「ある」人が 81 人に対し、検査の認知状況とのクロス集計の結果、21 人が検査についてよくわからない状況にありながら検査を斡旋していた（表 2）。

表 2 WISC の斡旋経験と認知度のクロス集計表(人)

	斡旋経験		合計	
	有	無		
WISC に ついて	よく知っている	60	7	67
	よく知らない	21	19	40
	合計	81	26	107

結果の解釈については、十分に自分でできると答えた人は約 1 割であった。にもかかわらず、検査結果を指導や支援に生かしているという人は 8 割以上あり、「今後プロフィール表から児童生徒の特性を読み取れるようになりたいか」との問いに対して、99 人が「なりたいたい」「できれば

なりたいたい」と答えた。

小学校と特別支援学校と比較した場合、小学校の教員の方が特別支援学校の教員より WISC の結果についての活用率や解釈できる人の割合が高かった。

(6) 考察

WISC の認知度は高い一方で、よく分からない検査を保護者に勧めている現在の実態が浮き彫りになった。特別支援教育の重要性が高まる中、教員の知能検査に対する熟知度を、今後一層あげていくことが急務と考えられる。

小学校と特別支援学校と比較した場合、特別支援学校の教員の方が WISC の結果について、活用率や解釈できる人の割合が高いと予想していたが、本研究では逆であった。特別支援学校以外の学校の方が、WISC 等の検査結果等客観的資料を用いて指導支援の方法を考えるケースが多いからだと考えられる。特別支援学校では、WISC という客観的ではあるが時間や手間のかかる検査を行わずとも、児童・生徒の実態を観察等の日々の生活や学習状況から詳しく知ることができ、児童・生徒一人ひとりに応じた適切な指導支援を工夫できるからだと推察できる。

以上のことから、WISC 等の結果をより欲しているのは特別支援学校以外なのではないかと推察される。今後小学校の教育現場では、日常的に知能検査等の結果をもとに、指導支援を検討していく機会が増えていくことが予想される。しかし、現状のままでは、解釈できる人が限られており、十分に児童に合わせた指導支援を柔軟に、臨機応変に工夫できているとはいえない。WISC 等の知能検査の内容や結果の解釈に関する教員研修の充実を今後期待したい。

IV 総合的考察と今後の課題

本研究では、子どもたちの「よいところを伸ばす」ことを中心に研究を行った。子どもに変化を期待するのであれば、直接子どもへの働きかけをすることはもちろん、その保護者への働きかけも不可欠である。子どもが一日のエネルギーを補給したり、心身ともに休息をとる場所は「家庭」であり、その代わりになる場所はなかなか存在しない。「家庭」でどのように過ごしているのかが、学校生活の過ごし方と一致すると言っても過言ではない。学校生活の頑張りは「家庭」での過ごし方

次第で、大きく変化するということである。

保護者に、これまでの子どもとの接し方について変化をもたらすことは、容易ではない。同じ内容を伝えるにしてもその伝え方次第で、保護者のとらえ方は変わり、気持ちも大きく変わる。保護者に「まずは自分が変わらなければ…」と感じさせるような伝え方や話し方に、本研究では最大限に配慮した。その結果、多くの保護者に「変化」が起こり、それに伴って子どもにも「変化」を生じさせることができた。保護者は、自分の子ども独自の子育てアドバイスを欲している。個に応じたアセスメントを保護者は求めているのである。このニーズに応えることにより、保護者の変化を導くことができる。本研究では、独自のアドバイスを行うため知能検査を利用した。しかし、知能検査はすべての子どもに実施できるわけではない。本研究は、検査結果を有効に活用することで、保護者を変化させることができた一例と言える。

知能検査はあくまで子どもの特性を客観的に表したもので、欠点や弱点ばかりを表すものではない。結果から読みとれる得意なことや強みこそを今後の指導支援の基盤に据えてほしいと考えている。子どもにとって「やる気」は何よりも強い武器になると筆者は考えている。子どもたちの、よいところを伸ばすための武器がたくさん見つかるような関わり方が今後望まれていると思う。

次に今後の課題について述べる。本研究で知能検査を行った結果、WISC-IVの新指標の一つである「ワーキングメモリ (WM)」に弱さのある子どもが想像以上に多かったことに驚かされた。

WMは、Gathercole, S.E.&Alloway, T.P(2009)によれば「数秒、せいぜい数分といった短い時間に、限られた情報を一時的に覚えることだけに用いられるもの」であり、「日常生活の中で、重要な情報を頭に保持しておくときに用いられ、脳の作業場もしくはメモ帳のような働き」ができるものである²⁾。更にWMの容量には個人差があり、これが少ないことは「日々の学習でのつまずきをもたらし、結果、学習遅滞を導く」との研究成果も出ている。Alloway, T.P(2011)は「ワーキングメモリは、学業成績を最も正確に予測し、IQよりも重要である。」と述べ、WMがIQ以上に学業成績に大きな影響があると指摘している³⁾ (図4)。

WMがこのように大きな教育的配慮事項であるにも関わらず、WMに対する教育現場の認識は

まだ低い。WMの重要性を広く教育現場に浸透させるとともに、保護者への理解も広げていく必要がある。今後は、子ども一人ひとりがもつ困り感がどんなものなのかを具体的に把握することで、指導支援の方法を工夫していくことが求められていると思う。更に、学校と家庭とが同じ方向を向いて子どもの成長を見守ったり、導いていくことが何よりも近道であると感じた。

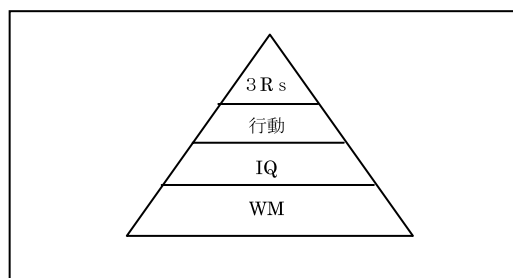


図4 学習ピラミッド

保護者の関わり方の変化が起こることで、子どもの情緒面、意欲面、行動面での変化が起こることが分かった。このことから、保護者の関わり方の重要性が強調された。保護者の関わり方の変化をうながせるような教員のアプローチを、今後の教育現場では意識していく必要がある。

子どもの「よいところを伸ばす」ことは、保護者の子どもへの関わり方に大部分がかかっているのではないかと筆者は考えた。学校の教員がどんなに頑張っても、保護者の接し方の足元にも及ばないことが、実際にあるからである。したがって、教員にまずできることは、保護者を支え、子どもを支えることだと考える。本研究の成果が、保護者や子どもたちを支えるための一つの方法として、多くの教員に活用されると何よりありがたい。

【謝辞】

本論文の作成にあたり、熱心に御指導いただいた石野陽子先生をはじめ、島根大学の皆様には、研修の場として最善の環境を整えていただきました。調査対象学校の皆様には、本研究の趣旨を理解し、快く御協力いただきました。皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

<引用文献>

- 1) 近藤千恵：子どもに愛が伝わっていますか心のかけ橋をきずく「親業」,三笠書房 (1983)
- 2) Gathercole,S.E.&Alloway,T.P (湯澤正通・湯澤美紀訳)：ワーキングメモリと学習指導教員のための実践ガイド,北大路書房 (2009)
- 3) Alloway,T.P (湯澤美紀・湯澤正通訳)：ワーキングメモリと発達障害教員のための実践ガイド,北大路書房 (2011)